

一貫性を考慮した家庭科カリキュラム構想と その改善に関する研究 (第2報)

— 基本カリキュラムを活用した京都教育大学各附属学校におけるカリキュラム —

加地 芳子・榊原 典子・稲木 昇子・久保 直美・北崎 亜希子
(京都教育大学) (京都教育大学) (附属高等学校) (茨木市立北中学校) (附属京都中学校)

國府 美幸・岸田 蘭子・八束 有子・野町 博美・小西 民子
(附属桃山中学校) (京都市立西院小学校) (附属京都小学校) (附属京都小学校) (附属桃山小学校)

Home Economics Curricula Construction and Improvement (Part2)
— Implemented Curricula in Attached Schools of Kyoto University of Education —

Yoshiko KAJI, Noriko SAKAKIBARA, Syoko INAKI, Naomi KUBO, Akiko KITASAKI,
Miyuki KOKUFU, Ranko KISHIDA, Yuko YATSUKA, Hiromi NOMACHI, Tamiko KONISHI

1999年9月30日受理

抄録：一貫性を考慮したカリキュラムの構築をめざして、「基本的概念」と「目標の観点」による基本カリキュラムを各附属学校で活用する。その作業を始めるにあたり、まず各附属学校の学習者の実態・特性を分析した。その特長と課題を踏まえたうえで、基本カリキュラムを基に各校カリキュラムを作成する。

各校の取り扱う題材には多少の相違があるものの、小学校から中学校・高等学校へと進む中で、学習内容の適時性と継続性を考慮し、「目標の観点（育てたい力）」を確認した。さらに、育てたい力を認識することで、学習内容の厳選や広領域・総合領域への取り組みができる。

また、京都教育大学附属学校は、京都地区・桃山地区に小学校・中学校がそれぞれ1校ずつあり、その各々から高等学校へ一本化されるという特性がある。それぞれの地区の独自性（各小学校と中学校の関わり）を生かしながら、2つの流れが一本になって高等学校への継続性をもつように、基本カリキュラムを活用した各校カリキュラムを報告する。

キーワード：各校カリキュラム、学習者の特性、厳選、適時性と継続性、地区の独自性

I はじめに

家庭科という教科は、常に家庭生活と密着した題材を取り上げているということは言うまでもない。その中の疑問点・課題を追求するために原理を理解し、科学的に分析していくことで、再び生活に返していき、生き方そのものを向上させていくための学習である。

学校教育を通して、その年齢に応じた展開を行うためにも取り扱う題材の選択は重要な要素となる。より身近な題材を扱うことで、生活に実行可能であったり将来構想がもてるような成

果につながるものと考え、それぞれの学校の子どもの実態をふまえないわけにはいかない。課題を解決していく方法は様々である。その子どもたちの実態・特性を生かして学習することで、より興味をもたせ、効果的なものとなっていく。表面的には実態をふまえ各校の独自性がありながら、その根底においては小・中・高の学びの連続性が重視されている必要がある。しかも本学の場合、小・中各2校で学習した者が1校の高等学校へ合流して連絡進学をする。このように、現象としては個々の学校の独自性を表現しながらも基本カリキュラムを踏まえることで、根底における一貫性が確保できるというシステムである。本報では、この基本カリキュラムに基づいて各校独自のカリキュラムをいかに編成するかを述べることにする。そこで我々は、まず、各校の子どもの実態を分析し、小・中・高へと連続性を持たせながらも、各校の特長と課題を生かした独自性のあるカリキュラムの編成を試みた。

Ⅱ 各校カリキュラム編成上の留意点

1. 学習者の特長の伸張と課題の改善

学習者の特長をさらに伸ばし、また逆に、課題と考えられる点を改善するためにはどのようなカリキュラムの編成がおこなわれるべきなのか。子どもの学びを主体としたカリキュラム編成には、具体的な学習活動を模索することも大切であると考え。ここでは本附属学校における学習活動形態への配慮を、学びの獲得との関係も含めて校種別にまとめることによって、学習者の学びの発達を支援するカリキュラム編成を考えた。

小学校では、「自分の生活を体験的に知る」、「学習者の立場に立った思考のつながりと深まりをもった単元の配列」に視点を合わせ、家庭の仕事の観察など「探る」という活動から今まで目を向けなかったものに目を向けさせた。また、基礎基本から創意工夫・応用へと発展できる調理の題材を設定した。その中で、責任感と成就感が得られるよう一人実習も試みる。生活体験の乏しい子どもに、課題別グループ編成により学習目標をもたせた。さらに、学び方の習得を意識し、捉える・ためす・いかすといった課題追求学習を取り入れた。

中学校では、「小学校での興味・関心を科学的に補強する体験的学習」を課題とし、学習課題を多面的な視点で探求する課題解決学習、グループでの実験や資料調べ・調査活動・データ分析などを中心におこなう。また、ディベート・ロールプレイング・ディスカッションなどによる知的なトレーニングによって思考力・判断力を練り上げる。作品製作においては、個人内評価や他者評価を取り入れ、見通しと意欲をもたせながら取り組ませるようにした。

高等学校では、「今までの積み上げを自分を取り巻く問題（自分・家族・社会）に対して、どのようにしていくか」「自立と生活者・家族関係などより広く、深く、総合的に物事を取り上げる」ことに視点を置き、常に、教師側からの質問の投げかけによる課題意識の充実をはかる。さらに、ディスカッション・班学習などでグループ内の交流をもたせ、物事を多面的・総合的に捕らえさせる。また、個人による様々な判断力をつけさせる作業も多く取り入れていけるようにカリキュラムを編成した。

2. 厳選への取り組み

小・中・高を通して、学習者が「できる・わかる」といった実感をともなった思いが積み上げられられるような学びを、教師は模索しなければならないと考える。学習者の発達段階によつ

て、「できる」はより質の高いものとなり、また「わかる」もより科学（人文・社会・自然）的な分析・認識をともなったものになってしまうと思われるが、学習者がその発達段階によってどのような力を身につけ、さらにどのように力を伸ばしていけるかを、小・中・高を通して考えることが、今、求められているのである。子どもたちのどんな力をどの概念で育てたいのかを考えたのが、基本カリキュラムであったが、それをどのような題材で育てるかを模索するのが、各学校独自のカリキュラムである。

伝統的に家庭科は、題材中心主義の教育をおこなってきた。今の生活に対応するために、知っていることやできることが特定でき、その力を身につけておけばできたからである。

しかし、現在私たちにとって一生そのままで有効な伝家の名刀はないといえる。生活が激変しており、今、新しい知識・技能もやがては古びて有効性を失ってくるのである。次々と新しく追い求めるのではなく、むしろ、状況に合わせて、その時必要な知識や技能を習得し、それらを生かして課題を解決する方法を育てること、そして、このことを可能にするのに最低限必要な知識・技能と生活者重視の価値観を育てることを中核にすえて考えるべきである。その時必要なものという発想で題材を追い求めることから脱皮することに、学習内容の厳選に対応する手がかりがあると考ええる。

カリキュラムを厳選することによつて、学習者は、それぞれの学校段階でじっくりゆとりを持って学習課題にせまることができ、そこでの学び方をメタ認知することができるのである。それによってのびのびと育っていけるものと考ええる。

本附属学校では、小・中・高の一貫性をめざすために、学習者特性や学習内容、その題材で特にどのような力を育てたいと考えているか等を交流しながら、子どもの学びをより充実したものにするための厳選されたカリキュラムの編成をめざしている。

3. 適時性と継続性の確認

校種によって、学習者特性があることは先程も述べた通りであるが、カリキュラムを編成する時、その特性を考慮して、ある学習内容を「どの学校レベルで取り上げるのが適当か」（適時性）、また、「一つの学校段階で取り上げるのではなく、小・中・高と一貫して積み上げていくのが適当か」（継続性）を検討する必要がある。

すなわち、前者においては「適時性」の確認が必要となり、後者においては何を「継続的」に取り上げる必要があるのかが問題となる。

本学附属小・中・高各々のレベルによる学習者の特長や課題が明らかになったが、この特長をより伸展させ、課題を解決するために有効なカリキュラムを考える必要がある。そのレベルの発達段階に符合した特長は、その時期にこそ伸ばすことが、効率のよい指導計画となる。

また一方では、発達の様相が変化する中で、それぞれの対応をしながら、多面的に息長く育てていくべき能力もある。この場合、各学校での責任分担を明確にした上で、各々の連続性についての配慮や、前レベルでの学習達成度の評価をふまえての指導計画の立案や学習者にとって、単調な繰り返し学習という印象を与えないように、具体的題材の設定に関して、学校間で調整をはかるなど、細部にわたる配慮が必要となる。

これを本学附属学校を例に挙げて考えてみることにする。

第一報に示した表7に見られるように、同じ基本的概念を取り扱ったとしても、各校種で目

標とする観点（育てたい力）が違っている一例として、『C 食事』が挙げられる。小学校レベルでは「生活者としての社会性（→家族の一員としての素養）」に重点を置くことで、家族の中の自己の再発見を導く。中学校レベルでは、「生活者としての社会性（→コミュニケーション）」に重点を置くことで、家族のみならず他者の中の自分を見つめさせ、多様な視点に立つて考えることで、学びの再編成を促す。高等学校レベルでは、「生活に対する感性（→他者への思いやりや愛情・文化の理解）」に重点を置くことで、社会の一員としての幅広い視野を持った考え方を支援する。これがいわゆる我々が、「適時性」と呼ぶものであり、学習者の発達年齢に合った「目標の観点」（育てたい力）の必要性が見えてくる。

一方、小・中・高と一貫して同じ基本的概念において同じ目標の観点（育てたい力）を示している例もある。基本的概念の『A 栄養と食品』と目標の観点の「健康・安全への配慮」や、基本的概念の『B 調理』と目標の観点の「実行力」などがそれに当たる。これらは、我々が、「継続性」と呼ぶものであり、学習者がそれぞれの学校段階で、少しずつ学びを深めながら積み上げることによって、めざす学習者像を育成することができると考えているものである。

4. 広領域・総合領域の設定

我々は、特定の領域・分野の中で、単元を構成することを一般的には行ってきた。しかし、この方法では、現在のように学習の内容が多様化し、膨大化した場合、単元数もそれに比例して増加し、学習量が非常に増加することになる。これでは、かえって、学習時間のスリム化に逆行することになってしまう。この問題を改善するためには、一単元の中に複数の要素を同時に含ませて構成するという方法が考えられる。もちろん単純にひとまとめにするのではなく、要素間の関連を学ぶ場となる構成方法を考えなければならない。例えば、一つの基本的概念を取り上げてみた時、その概念が、多様な領域に位置づけられている多数の学習内容と関連していることがわかる。すなわち、このことは、私たちのくらしは、たとえ単一の基本的概念を取り上げたとしても、その基本的概念は多種多様な要素との関係の上に成り立っているということを示している。ここから、私たちのくらしが複数の要素の相互関係や総合的關係性によって成り立っていることを、学ぶことができるのである。

どの学びのために、どの題材を組み合わせれば良いのかを考えることは、複数の題材を同時に扱うことができるという単なる能率の面だけではなく、質的な面から見ても、くらしを深めるためのより有効な取り組み方となる。

つまり、一つの題材から、多くの概念を関連づけて扱うことで、学習者の視野の広がり、興味・関心の深まりといった、よりよい学びが支援できるものと考ええる。それが、ここでいう「広領域・総合領域」で学ぶことの効果である。学習者の学びを主体とするカリキュラム研究では、これらの可能性を大いに模索し、編成にあたって留意する必要がある。

「広領域・総合領域」の視点から単元編成をする時、一つの基本的概念に関する各領域の学習内容群を参考に、編成するのも一つの方法である。しかし、それをもっと柔軟に発展させて、複数の基本的概念を関連づけた上での単元構成や、目標の観点の間での関係に着目した方法などを工夫することができると考える。

本附属学校における広領域・総合領域についての試みの一例を簡単にあげてみると、小学校では「夏のくらし」という題材で衣食住を総合的に扱い、かつ地域の特色を生かしている。中

学校では、家庭生活領域で「周りの人々の生活」という題材で、やはり、衣食住を総合的に扱い、かつ環境・資源・福祉の要素をも含む学習内容としている。高等学校では、様々な題材において、福祉・家事労働・経済の要素を含む学習内容としている。

5. 各校における研究課題や教育理念との関連

我々は、小・中・高の一貫性を考慮した家庭科の学習によって、どのような子どもたちを育てていっていくのかを、レベル別に設定した学習者像を通して捉えようとしている。しかし、附属学校では、同時に各学校独自の研究課題や教育理念を掲げて、各教科が協力しながら、あるべき学習者像を求めて、教育研究活動を展開している。

すなわち、家庭科という教科を貫く「タテの流れ」と、日々の学習活動の中で他教科や教科外活動など「ヨコへの広がり」との交点で教育が行われている。我々のカリキュラムの個々の内容が、この交点の上で機能しているということを認識し、これら二要素を有効に関連づけ活用することによって引き起こされることが期待できる相乗効果を、積極的に活かしながら、教育活動を進めていく必要がある。

このことを、別の視点から捉えらるなら、学校全体で、総ての教科や活動を通して、子どもたちに育てられる能力を有効に活用しながら、それを前提にした家庭科教育の展開を検討することは、必要なことである。

Ⅲ 「基本カリキュラム」をベースにした各校カリキュラムの作成（平成9年度）

1. 各附属学校における学習者の特性

各附属学校における学習者の学びの実態から、子どもたちの学びの特長と課題となる点を整理し、各校が家庭科で目指している学習者像を示しておく。

(1) 附属京都小学校

子どもたちは「自分でできる」という実感を味わう学習や、自分の思いを生かして工夫し何かをするという学習により、充実感や期待感をもち、それらができた時、満足感から自信がついてくる。また、自分の力でできるようになったことを他に認められることから、追求する課題を見つけ解決していくことで、「学ぶ喜び」が得られ、成長につながっている。

一方では、生活体験に個人差があり、意欲があっても生活体験の乏しさから活動できない、また、自分の思いももてないという課題もある。

このような特徴・課題から、「自分なりの生活の仕方を創造する子」、すなわち、家族の一員として、生活者として、自分の役割や責任をしっかりと自覚し、自分にできることに自信をもち、自分らしさや自分の可能性を大いに発揮できる学習者を目指している。

(2) 附属桃山小学校

家庭生活や身の回りの様子を観察する中で、子どもたちは自分の気づきから「課題」が見つけられる。それを、学校で友達と交流し、互いに育ち合うことができ、さらに、その学び合ったことや高め合ったことを暮らしの中に生かしていく力をもつ。しかし、京都小学校と同様に、生活に個人差があり、意欲も子どもによって様々である。

よって、「自分の思いを暮らしに生かす」学習者像を目指す。体験的学習を中心に、学ぶ喜びを味わいながら、家庭生活における基本的な知識や技術を身につけさせていくことで、子ど

もたちが家族の一員として自己の再発見をし、生活の中の問題を創意工夫していくのである。

(3) 附属京都中学校

小学校での学びにより、作業や実習・実験など自らが主体的に活動する実感を得やすい学習では、特に意欲的で、話し合い活動でも、個々がそれぞれの意見を自由に発言し合える雰囲気をもつ。しかし、小学校からの流れで家庭生活のなかでは「～してもらう」的立場に立ち、自らの学習課題の改善点を見つけられなかったり、計画性をもって物事に取り組めない生徒もいる。

よって、家庭生活の中で、まず自分のできることややりたいことを積極的に取り入れさせ、さらに、科学的な視点をもって物事を捉え、「自分の考え」をしっかりとつこと、よりよい家庭生活を創り上げていく力をつける。

(4) 附属桃山中学校

京都中学校と同様に、自分の興味・関心や級友の疑問から学習課題を設定し、それを自分なりのやり方で探求し、解決していくという主体的な学習ができる。さらに、調査や研究の方法を工夫したり、多様な視点で物事を捉えながら、学びを再構成していくこともできる。しかし、両附属小・中にもみられる、生活者としての基本的な知識や技能の習得が不十分であったり、京都中学校にもみられるが、時間的・内容的な計画、見通しが立てにくく、何事も他者へ依存する傾向にある生徒もいる。

そこで、桃山中学校においても、日常生活をしっかりと見つめ、その問題点に気づき、自分なりに生活を創意工夫していく学習者を目指している。そのためにも、日頃当たり前だと思っていたことや疑問に思っていたことを、科学的に検証したり他者に働きかけて調査したり、視点を動かすことによって、多面的に物事を考えていくような力をつける。

(5) 附属高等学校

両小・中学校の学習の流れをもつ。自分の意見をまとめて表現する力や科学的な理解力に優れ、与えられた作業や課題に対して真面目に取り組み、処理する能力がある。しかし、高校生になると、さらに生活実感が乏しく、現在の状況しか見えていない。また、受け身的・親任的な面が強く、自らが生活を探求し、課題へと発展させることが困難である。

よって、まず、より幅広い情報を受け入れさせ、情報交換することで、今の自己のあり方や家族のあり方を見直させ、その評価できる部分や問題点・改善方法を自ら学び取って、実生活に生かしていき、そこから将来の自己の生き方（個人として、家族や社会の一員として）を考えさせることまで発展させることができるような学習者を目指している。

2. 各校のカリキュラムの実際

基本カリキュラムをもとに、本附属学校の学習者の特性や単元名と基本的概念・目標の観点の関係を考慮して各校カリキュラムを作成した。第一報にて平成9年度各附属学校の具体的な「学習単元」と「基本的概念」・「目標の観点」との関係を表7に示したが、これは、附属学校毎に単元名と目標の観点との関係を●◎○（重点的にねらう度合）で表にあらわすことによって、各校種でその単元においてどのような能力を育てたいかがわかり、同じような単元でも、校種が異なれば重視する目標の観点も異なり、教材を通して指導者側がねらっている学力、すなわち適時性が明確になる。また、子どもの発達段階に応じて、継続的に能力を育てるために学習する単元もあることがわかるものであった。

さらに、その表に単元名と基本的概念との関係を加える。単元名と各校種レベルにおける基本的概念を線で結んでみた。（180頁～189頁の表1-1～5-5参照）

小学校では、一つの単元に様々な基本的概念がかかわっており、広領域・総合領域の学習が実施されている。例えば、附属京都小学校6年生では、単元に「夏のくらし」があるが、衣食住領域をはじめとして総合的に学習すると同時に、京都という地域性を生かした学習内容にもなっている。（表1-2参照）

中・高では、領域毎に特に集中している基本的概念が見られるが、小学校に比べると、より専門性が高くなる結果であるといえる。しかし、学校レベルに応じて、別の基本的概念ともかかわってはいる。カリキュラムの厳選・スリム化を図るためにも、中・高等学校においても広領域・総合領域学習は可能である。例えば、中学校では、家庭生活領域で、衣食住・環境・コンシューマリズム・資源・福祉などの基本的概念を含んだ学習を行っている（表2-1、4-1参照）。高等学校でも、家庭生活の設定・家族の分野で、衣食住・環境・福祉・コンシューマリズム・職業・資源などの基本的概念を含んだ学習を行っている（表5-2参照）。

このように、京都教育大学附属学校の学習単元においては、広領域・総合領域の学習の可能性は高いが、各校種レベルの領域と基本的概念による学習内容の関係をを用いると、さらに精選された広領域・総合領域の学習を組み立てることができる。

次に、具体的な適時性・継続性を、附属学校の地区毎（京都地区・桃山地区）にまとめてみた。それぞれの地区の特徴を生かし、学習者の特性も考慮した小・中学校での学び方について、また、両地区が合流することになる高等学校での学び方をみる。

（1）京都地区（小・中学校）の特徴と重視する学習内容

京都地区では、附属京都小学校で学んだ子どもたちの多数が、京都中学校へ進学する。京都地区の子どもたちの特徴としては、先にも述べたように、個々の意見を自由に発表したり、自らの思いを活かした活動に意欲的に取り組む一方、実生活での体験が乏しいために、自分から家庭生活の中で課題を見つけたり、その課題を解決する力の乏しい子たちが多い。

京都小学校では、「自分なりの生活の仕方を創造する子」を目指し、自分の家族に根ざした題材を取り上げることによって、具体的・体験的に実感することを通して、家族への理解を深めることをねらっている。自分ができること、わかったことをもとに家族の一員として役立つことができるということを大切に学ぶ喜びを味わわせる。そのため、個人の家族にかかわる学習場面が多いので、基本的には個人の課題追求活動が展開される。また、京都小学校では、学校として共生学習を取り入れている。このようなことから、自分で調べる活動が多いので、教師の支援として調べるための資料や時間、家族への働きかけが必要である。さまざまな学習の中でも、一人実習は、自主性や責任感を育てることにもつながる。

中学校では、「家庭生活の中で自分ができること、やりたいことを積極的に取り入れてよりよい家庭生活を創り上げていく子」を目指し、自分の家族とかかわらせながらも、小学校のような心情的な思いやりだけでなく、実験や実習を通してより科学的な思考をもとに学ぶ楽しさを味わえるよう発展させる。また、小学校に続いて個人の課題追求活動や訪問・観察などの実感・体験学習を展開する中で、さらに自主性の育成を目指す。学習過程においては、話し合い活動を重視し、他者の考えをもとに自分の思考を深める場面を多く取り入れる。また、京都中

学校でも、総合学習を取り入れており、より多面的な視点から意志活動を練り上げる学習方法が行える。

京都地区の小・中学校の適時性・継続性の例として食物領域における学習例を挙げてみる(表1-2, 2-2参照)。小学校の「家族も喜ぶサンドイッチを作ろう」という題材では、家族と過ごす時間を大切にすることを重視し、しかも6つの食品群の種類を組み合わせるバランスを整える献立づくりの基礎を計画・実習という体験学習を通じて学ぶ。

中学校の「家族のための思いやりチャーハンを作ろう」という題材では、自分の家族を中心に青少年の献立に加えて「食品群別摂取量のめやす」をもとに、老人食や幼児食の献立も具体的に計画を立ててみる。食品群別摂取量を年代別に数的に処理したり、食品の特性をより科学的に捕らえることなどを通して科学的な思考のもとに学ぶ。

以上の題材を学習する上で、関連する「基本的概念」と「目標の観点」を挙げると、次のようになる。

(注) () 内は、その他関係すると考えられる項目

《基本的概念》	栄養と食品	調理	食事	(自分・自己概念)
	(人間関係・他とのかわり)		(人間発達)	(福祉)
	(コンシューマリズム)		(資源)	
《目標の観点》	自己尊重	実行力	家庭生活への関心	家族への理解
	健康・安全への配慮	数的処理	分析的思考	
	生活技術技能獲得	相互理解	コミュニケーション	
	家族の一員としての素養	他者への思いやり・愛情		
	生活様式の創造	構想力	マネジメント力	
	(自己尊重)	(判断力)	(意思決定力)	
	(基本的生活習慣の形成)		(家庭生活への関心)	
	(生活の原理原則の理解)		(情報獲得)	(予測力)
	(生活の美・芸術性)		(マネジメント力)	

小学校を基礎として、生活の創意工夫で生活の美を学んでいくことや、小学校では自分の周りの人々との関係が、中学校ではさらに幼児や老人にまで広げて人間関係を深く学ぶといった継続性がある。また、小学校では、食品群を満たすかのチェックで終わっていたものが、中学校では数的処理を用いた分析的思考へと発展し、校種による適時性も見られる。

小→中→高の流れの中で、教材のスリム化を考えつつも全ての子どもに同じカリキュラムを押しつけるのではなく、それぞれの地区の特徴を生かしながら基本的学力を同じようにつけた上で高等学校へ進ませることが求められる。つまり、学校独自のカリキュラムを組むとしても、バリエーションのある活用性のあるものが必要であると考えられる。

(2) 桃山地区(小・中学校)の特徴と重視する学習内容

小学校の子どもたちは、好奇心旺盛で、何でも自分の目で見て確かめたり、自分で作って楽しんだりする。「○○を作りたい」「ミシンを使えるようになって、エプロンを作りたい」、「今、はやりのミサングを作って友だちにプレゼントしたい」など、自分の思いを持って取り組んでいく。子どもは「一生懸命やればできそうだ」、「自分にもできるのではないだろうか」という見込みと意欲を持っているからであろう。これまでの生活経験は少ないのであるが、資料を調

べたり見よう見まねであったり、何でも自分で体験することから、自分だけのものを作り上げたときの喜びは大きく、それが自信につながるものと思う。自分で作ったものが、暮らしの中で活かされ役に立ち、「これはいいね、役に立つね」と家族に喜ばれることから内にある成功感が、次の学びへと向かうのであろう。

小学校では、子どもの体験を励まして体験する喜びを味わわせ、主体的に実践できる子どもを育てている。子どもの一人ひとりの貴重な体験やそれぞれの家族の工夫・身近な情報を集めて問題点を考える・暮らしに必要なものを計画的に選択するなどを、学校で交流することで実践の意欲を高めている。

桃山小学校では、子どもの自主性や創造性を培うために創造教育を進めている。指導者は、子どもの持つ可能性を見つけ、どのように伸ばしていくかを大切に考えて指導しているのである。そして、自己を切り拓いていく子ども、自分自身で問題を解決しようとする子どもを育てている。自分で納得する答えが見つかる喜びも大きくなり、暮らしに働きかける力となる。このような学習を進めることが、中学校で実証することや、科学的に追求する力となっていくものと思われる。

中学校では、学習方法や形態を生徒の学びによって自由に変化させ、より深く学習課題に迫っていく。つまり、小学校段階では困難であった、より高度な探求学習を行う。中学生が自分たちの手で、調査・実験・考察・討論・シミュレーションなどを行う中で、今までの教師主体の知識の受け売りから、さらに思考を深め、自分なりの納得のいく課題解決ができるのである。学習方法や形態などを生徒に自由に選択させることで、課題に対する興味・関心を高め、試行錯誤しながらも、より深く課題に迫っていけるよう、指導者は支援する。このように、学びの再構成を行うことによって、多様な視点から、より生活に根ざした意見をもつことができるようになる。生活体験に乏しい子どもたちに、直接体験を通した基本的な知識や技術の習得・伸展と共に活動することの喜び、そして自ら学ぼうとする主体的な学習活動の実現をめざして授業実践を行うことにより、社会の変化に主体的に対応できる生徒の育成、すなわち、日常生活をしっかりと見つめ、その問題点に気づき、自分なりに生活を創意工夫しようとする生徒の育成をめざす。

桃山地区の例としては、小学校では、「くらしと買い物」という題材で、家庭で買い物をする。その後、買い物をしたときの観察文を持ち寄り交流会を持った。さらに買い物調査を行ったり、実際におやつのおやつの計画を立てて、買い物学習を行った。それを試食しながら再び交流を行って、値段・栄養・品質表示などのおやつの買い方を工夫する学習を行った。（表3-2参照）

《基本的概念》	住環境	コミュニティー	省エネルギー
	自分・自己概念	人間関係・他との関わり	福祉
	(栄養と食品)	(食事)	
《目標の観点》	自己尊重	判断力	意思決定力
	健康・安全への配慮	数的処理	情報獲得
	家族の一員としての素養	社会の一員としての素養	総合理解
	快適性を追求する力	マネジメント力	

中学校では、小学校でおやつの特検を行った際にも気付いた、食品添加物について「食品の選択と購入」にて、グループ別課題を設定し、個人調査・グループ実験を経て、考察・発表・討論へと発展させ、さらに、シミュレーションを学級全体で行い、最終的に個人で意見の再構成をしていく学習がある。(表4-2参照)

《基本的概念》	栄養と食品	調理	食事	
	(自分・自己概念)	(コンシューマリズム)		
《目標の観点》	自己尊重	判断力	意思決定力	実行力
	家庭生活への関心	家族への理解	健康・安全への配慮	
	分析的思考	情報獲得	家族の一員としての素養	
	社会の一員としての素養	快適性を追求する力		
	マネジメント力			

桃山地区の例では、学習形態(学び方)の継続性があげられる。小学校段階で、十分な意見交流をもって学習することで、中学校においてもグループによる討論や学級全体の中で発表できるという力となっている。小学校では、添加物の認識が、表示などより味や色といった五感を用いた学習での判断力を中心とするが、中学校では、科学的な知識を含む情報の獲得による分析へと発展し、適時性および継続性がみられる。

(3) 高等学校の特徴と重視する学習内容

高等学校へは、両地区から進学する者で約80%を占める。それぞれの地区が扱う題材には多少の相違はあっても、目標の観点(育てたい力)には相等しいものがある。また、学習形態(学び方)にも、共通性が見られる。このように課題解決学習・探求学習を積み重ねてきた子どもの能力を受けて高等学校では、より科学的に課題を分析し、実際の生活へ応用・発展できる力をつけさせる。また、今ある家庭の中での自己の立場としてだけでなく、将来、その家族のかかえる問題点や自分のあり方について思考できる能力を養っていく。一方、一人の生活者として社会の中で生きていくには、家族・家庭と社会との接点や問題点を理解させ、自分が社会の中でどのような力を発揮することができるか、また、発揮しなければならないかといった、社会との共生を考えさせ、その力を養わせたい。しかし、自我を尊重する中学生期から間もなく、独りよがりな意見をもったり、行動しがちな時期でもある。さらに進学を控えて目先のことが重視される子どもにとって、生活は決して能動的なものではない。その子どもに、小・中で培った学び方を生かし、個別・グループで調べる・発表するといった、より多様な課題解決学習を取り込み学習させていく。また、自己の生活の見直しから一般化がはかれるように、自分の学習の自己評価も行わせる。このような、主体的な学習を保障するためには、指導者側の支援として、図書・写真・ビデオなどの資料を用意したり、自由に使用できる視聴覚機器を備えたり、他教科との連携をもつ必要がある。

両地区を受けて、高等学校としての継続性の例としては、食物領域の「自由献立作成」(表5-1参照)があげられる。献立作成は、小・中学校でも行っているが、健康な生活を送るためには、バランスのよい栄養の取り方と、4つの食品群別摂取量のめやすをもとに、食事の計画を立てるとともに、人間の体の健康の保持・増進や人間の発達と日常の食事とのかかわりを見つめながら追求するまでの適時性もある。なぜそういう食事が必要なのかという問題意識

をもたせることで、自己の食生活から理解の一般化をはかる。

《基本的概念》 栄養と食品 調理 人間関係・他との関わり
人間発達 コンシューマリズム

《目標の観点》 実行力 家族への理解 健康・安全への配慮
家族の一員としての素養 マネージメント力
(自己尊重) (生活の原理原則の理解) (数的処理)
(分析的思考) (構想力)

グループ別に献立作成するが、「和食」というテーマの中で、栄養的配慮・グループの嗜好・安全や衛生への配慮・時間内での計画や予算などのマネージメント力といった多種多様な角度から献立作成する高等学校の適時性と、グループ別に検討する力、個人で分析・考察する力、基礎的な学力など小・中学校で培われてきた学び方や学習内容の継続性がある成り立つ学習といえる。

IV おわりに

基本カリキュラムの活用にあたって、京都教育大学附属学校の平成9年度単元・題材（学習内容）を提示し、基本的概念・目標の観点との関係を検討してみた。基本カリキュラムにもとづいた各校のカリキュラムにより、学習内容の適時性・継続性が理解できるのみならず、学習者の特性を考慮した学び方の継続性や広領域・総合領域学習も加味された、一貫性あるカリキュラムであるといえるのではないだろうか。

また、基本カリキュラムに対照することで、何をどのように学び、どのような力を備えてきたかわかるので、何が不足しているか、次の学校段階で何を重点的に伸ばすべきかが考えやすくなる。それは、学習内容の厳選へもつながり、スリム化をはかることとなる。

私どもは、家庭科カリキュラムに小・中・高の一貫性をもたせながら、しかも同時に、一人ひとりの子どもたち・学級集団・学習集団の特性や教師の持ち味を活かした家庭科学習を進めることはできないか、子どもたちがくゆとりをもって学ぶことができるために、安心して内容をスリム化することはできないか、さらには、現在われわれが抱えている生活課題にいかに対応することができるのかという実践的教科としての特徴を確保しながら、生涯を見通してどのような力を育てていくべきかという種々の課題にも対応できるカリキュラムはどのように構想すればよいのかという大変欲張りな思いをかかえて、この研究に取り組み始めた。

今後、「家庭科基本カリキュラム」の改善は言うに及ばず、これの活用の際の指導計画編成理論の充実と具体的展開例の開発、さらには、本カリキュラム構想の下での子どもの育ちを客観的、継続的に把握して、その結果を、カリキュラムや指導に反映していくことなど、これからの課題がエンドレスにつづいている。

表1-1 目標の観点から見た学習内容の取り扱いと基本的概念との関係
(附属京都小学校＜5年＞)

[illegible]

表1-2 目標の観点から見た学習内容の取り扱いと基本的概念との関係
(附属京都小学校＜6年＞)

[illegible]

表 2-1 目標の観点から見た学習内容の取り扱いと基本的概念との関係
(附属京都中学校〈家庭生活〉)

[illegible]

表 2-2 目標の観点から見た学習内容の取り扱いと基本的概念との関係
(附属京都中学校＜食物＞)

[illegible]

表 2-3 目標の観点から見た学習内容の取り扱いと基本的概念との関係
(附属京都中学校＜被服＞)

指導を欠かさない項目 非常に重視するもの ● 重視するもの ○ 必要のあるもの ○	学習内容と 基本的概念との 関連	目標の観点 (背てたい力)	生活者としての個人の確立							生活の科学性							生活者としての社会性				生活に対する感性				生活の創造性				生活の経営			
			自己尊重	判断力	意思決定力	基本的生活習慣の形成	家庭生活への関心	健康への理解	生活の原理原則の理解	健康・安全への配慮	散策的思考	分析的思考	情報獲得	生活技術・技能の獲得	相互理解	コミュニケーション	家族の一員としての役割	社会の一員としての役割	生活の美・芸術性	快適性を追求する力	価値への思いやり・愛惜心	伝統・文化の理解	生活様式の創造	環境意識	環境力	予備力	構想力	マネージメント力				
基本的概念	学習単元名		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26				
A 栄養と食品		<被服>																														
B 調理																																
C 食事		私たちと衣生活 私たとも被服 被服のはたらき	○	○									○		○				○	○	●											
D 被服管理 (清潔と手入れ)																																
E 衣・服飾・服飾製品																																
F 被服構成		日常着の製作 私たちの生活と 日常着 製作の計画と課題		○		○	○						○	○	●					○	○						○	○				
G ファッション・着装																																
H 居住空間																																
I 家族と家																																
J 住環境		作業品の製作 手芸と生活	○			○										○				●							○	○				
K コミュニティー																																
L 省エネルギー		よりよい衣生活を 目指して																														
M 科学技術		着方の工夫 着脱後の被服の 新法				○	○						○	○													○	○				
N 自分・自己概念		被服の購入の仕方 これからの衣生活	○	○	○	○							○	○	○											○	○	○				
O 人間関係・ 他との関わり																																
P 人間発達 (子ども、高齢者を 含む)																																
Q 親になること																																
R 福祉																																
S コンシューマリズム																																
T 職業																																
U 資源																																
V ジェンダー																																

表 2-4 目標の観点から見た学習内容の取り扱いと基本的概念との関係
(附属京都中学校＜住居＞)

[illegible]

表 2-5 目標の観点から見た学習内容の取り扱いと基本的概念との関係
(附属京都中学校＜保育＞)

[illegible]

表3-1 目標の観点から見た学習内容の取り扱いと基本的概念との関係
(附属桃山小学校<5年>)

[illegible]

表3-2 目標の観点から見た学習内容の取り扱いと基本的概念との関係
(附属桃山小学校＜6年＞)

[illegible]

表4-1 目標の観点から見た学習内容の取り扱いと基本的概念との関係
(附属桃山中学校〈家庭生活〉)

[illegible]

表 4-2 目標の観点から見た学習内容の取り扱いと基本的概念との関係
(附属桃山中学校＜食物＞)

[illegible]

表 4-3 目標の観点から見た学習内容の取り扱いと基本的概念との関係
(附属桃山中学校＜被服＞)

指導を欠かさない項目		目標の観点 (習得たい力)	生活者としての個の確立							生活の科学性				生活者としての社会性				生活に対する感性				生活の創造性				生活の観賞			
非常に重視するもの 重視するもの 必要のあるもの			学習単元名	自己尊重	判断力	意思決定力	実行力	基本的生活習慣の形成	家庭生活への関心	家族への理解	生活の原理原則の理解	健康・安全への配慮	数的処理	分析的思考	情報獲得	生活技術・技能の獲得	相互理解	コミュニケーション	家族の一員としての役割	社会の一員としての役割	生活の美・芸術性	快適性を追求する力	倫理・文化の理解	伝統・文化の理解	生活様式の創造	環境認識	想像力	予測力	マネジメント力
基本的概念			1	2	3	4		6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	
A 栄養と食品		<被服>																											
B 調理		日本食の製作 伝統食・日常食の 条件とは			○									○															○
C 食事		日常生活	○	○	○	●							○	○	●								○	○					
D 被服管理 (選択・手入れ)		手荒品の製作 生活に手荒を 生かそう	○	○	○	○							○	○		○													○
E 衣・履物・繊維製品		よりよい衣生活を 実現しよう																											
F 被服構成		被服の購入・ 着方について 知ろう	○	○	○	○							○	○		○							○	○					
G ファッション・着装		着方を工夫しよう 着方・手入れの 特徴をしよう	○	○	○	○								○		○							○	○					
H 居住空間		これからの衣生活 に向けて	○	○	○																		○	○					
I 装飾と家具																													
J 住環境																													
K コミュニティー																													
L 省エネルギー																													
M 科学技術																													
N 自分・自己概念																													
O 人間関係・ 他との関わり			○	○	○	○								○		○							○	○					○
P 人間発達 (子ども・高齢者を 含む)			○	○	○																		○	○				○	
Q 働くこと																													
R 福祉																													
S コンシューマリズム																													
T 職業																													
U 資源																													
V ジェンダー																													

表 4-4 目標の観点から見た学習内容の取り扱いと基本的概念との関係
(附属桃山中学校＜住居＞)

指導を欠かさない項目 非常に重視するもの 重視するもの 必要のあるもの	学習内容と 基本的概念との 関連	学習単元名	生活者としての心の確立		生活の科学性				生活者としての社会的性		生活に対する感性		生活の創造性		生活の経営													
			自己尊重	判断力	実行力	意志決定力	基本的生 活習慣の 形成	家庭生 活への関 心	家庭へ の理解	生活の 原理原則 の理解	健康・安全 への配慮	数的地理	分析的思 考	情報理解	生活技術・ 技能の獲得	相互理解	コミュニケーション	社会の一員 としての意 識	生活の美・ 芸術性	快適性を追 求する力	他者への 思いやり・ 愛情	伝統・文化 の理解	生活様式 の創造	環境形成	予測力	構想力	マネー・シ ミュレーシ ョン力	
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16 素数	17 素数	18 素数	19	20 素数	21	22	23	24	25	26
		<住居>																										
A 栄養と食品																												
B 料理																												
C 衣類		私たちとすまい 暮らしを住まいと 住まい方 住まいの役割 中学生とすまい																										
D 被服管理 (家政と手入れ)																												
E 布・繊維・健康製品																												
F 被服相談																												
G ファッション・着飾		家庭の生活と 住空間と住まい 家族の生活と 住まい方 家族みんなで 使う空間 生活に必要な広さ																										
H 居住空間																												
I 設備と家具																												
J 住環境																												
K コミュニティー																												
L 省エネルギー		真内環境の質量 安全な住まい 健康的な 住まい																										
M 科学技術																												
N 自分・自己概念																												
O 人間関係・ 社会との関わり																												
P 人間関係 (子ども・高齢者を 含む)		居住環境と 住まい 地域とすまい 環境安全と 住まい方 家庭生活とゴミ 環境安全のための 新しい住まい方																										
Q 質になること																												
R 福祉																												
S シンジュマリズム																												
T 職業																												
U 資源		よりよい住生活を 目指して																										
V ジェンダー																												

表4-5 目標の観点から見た学習内容の取り扱いと基本的概念との関係
(附属桃山中学校＜保育＞)

[illegible]

表5-1 目標の観点から見た学習内容の取り扱いと基本的概念との関係
(附属高等学校＜食生活＞)

[illegible]

表5-2 目標の観点から見た学習内容の取り扱いと基本的概念との関係
(附属高等学校<家庭生活の設計・家族>)

目標の観点 (育てたい力)		生活者としての習得の確立								生活の科学性							生活者としての社会性					生活に対する感性					生活の創造性					生活の経営				
		自己尊重	判断力	意思決定力	実行力	基本的な生活習慣の形成	家庭生活への関心	家庭生活への理解	健康・安全への配慮	能率的思考	分析的思考	情報獲得	生活技術・技能の獲得	相互理解	コミュニケーション	家族の一員としての役割	社会の一員としての責任感	生活を営む能力	迅速性を追求する力	物事への思いやり・愛情	伝統・文化の継承	生活様式の創造	環境認識	洞察力	予測力	マネージメント力										
学習内容と基本的概念との関連		学習単元名																																		
基本概念的		＜家庭生活の設計・家族＞																																		
A 栄養と食品	指導を欠かせない項目 得意に達成するもの ● 理解するもの ○ 必要のあるもの ○	家庭の機能																																		
B 調理		家庭の起源																																		
C 食事		ファッション・着装																																		
D 被服管理 (選択と手入れ)		日本の家族の歴史																																		
E お・暮る・消費製品		民法																																		
F 被服作成		現代の家族																																		
G ファッション・着装		自分・自己概念																																		
H 居住空間		人間関係 他との関わり																																		
I 家具と道具		人間関係 (子ども、高齢者を含む)																																		
J 住環境		親になること																																		
K コミュニティー		福祉																																		
L 省エネルギー		コンシューマリズム																																		
M 科学技術		生活時間																																		
N 自分・自己概念																																				
O 人間関係 他との関わり																																				
P 人間関係 (子ども、高齢者を含む)																																				
Q 親になること																																				
R 福祉																																				
S コンシューマリズム																																				
T 健康																																				
U 資源																																				
V ジェンダー																																				

表5-3 目標の観点から見た学習内容の取り扱いと基本的概念との関係
(附属高等学校<家庭経済>)

目標の観点 (育てたい力)		生活者としての個の確立							生活の科学性					生活者としての社会性			生活に対する感性		生活の創造性		生活の経営						
		自己尊重	判断力	意思決定力	実行力	基本的 生活習慣の 形成	家庭 生活への関心	家庭 への理解	健康・安全 への配慮	数的処理	分析的思考	情報獲得	生活技術・技能の獲得	相互理解	コミュニケーション	社会の一員としての 責任	生活の美・芸術性	快適性を追求する力	他者への思いやり・ 愛情	伝統・文化の理解	生活様式の創造	環境認識	予測力	構想力	マネージメント力		
学習単元名		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
学習内容と 基本的概念との 関連																											
A 栄養と食品																											
B 調理																											
C 家事																											
D 被服管理 (着脱と手入れ)																											
E 衣・服飾物・繊維製品																											
F 健康構成																											
G ファッション・着装																											
H 居住空間																											
I 寝具と家具																											
J 住環境																											
K コミュニティー																											
L 省エネルギー																											
M 消費者教育																											
N 自分・自己概念																											
O 人間関係・ 他との関わり																											
P 人間関係 (子ども・高齢者を 含む)																											
Q 風になること																											
R 福祉																											
S コンシューマリズム																											
T 風景																											
U 音楽																											
V ジェンダー																											

表5-4 目標の観点から見た学習内容の取り扱いと基本的概念との関係
(附属高等学校<衣生活>)

目標の観点 (育てたい力)		生活者としての個の確立							生活の科学性					生活者としての社会性			生活に対する感性		生活の創造性		生活の経営						
		自己尊重	判断力	意思決定力	実行力	基本的 生活習慣の 形成	家庭 生活への関心	家庭 への理解	健康・安全 への配慮	数的 処理	分析的 思考	情報 獲得	生活技術・技能 の獲得	相互 理解	コミュニケーション	社会の一員としての 責任	生活の豊 ・芸術性	快適性を 追求する力	他者への 思いやり・ 愛情	伝統・文化の 理解	環境 認識	生活様式 の創造	予測力	構想力	マネー ジメント力		
学習単元名		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
学習内容と 基本的概念との 関連		<衣生活>																									
A 栄養と食品		服の機能																									
B 調理		服の材料																									
C 家事		服の選択																									
D 洗濯管理 (選択と手入れ)		服の管理																									
E 衣・服飾・健康製品		服の実習 (デザイン画)																									
F 服の機能																											
G ファッション・着装																											
H 居住空間																											
I 装飾と家具																											
J 住環境																											
K コミュニティー																											
L 省エネルギー																											
M 科学技術																											
N 自分・自己概念																											
O 人間関係・ 他との関わり																											
P 人間発達 (子ども・高齢者を 含む)																											
Q 転じること																											
R 福祉																											
S コンシューマリズム																											
T 職業																											
U 芸術																											
V ジェンダー																											

●重視するもの
○重視するもの
○生のあるもの

[illegible]